



ミチクサって必要？

みなさん、「ミチクサ先生」という小説を読まれた方はあるでしょうか。

（「ミチクサ先生」は、防府市出身の作家、伊集院静さんが文豪「夏目漱石」を主人公にして書かれた小説です。残念ながら、伊集院さんは、昨年病気により亡くなりました。「機関車先生」「海峡」「大人の流儀」等、これまでにたくさんの作品を遺しておられます。防府市の出身の方ですから、みなさんも伊集院さんの小説を読んでみませんか）

今号では、その小説の中に考えさせられる文章がありましたので取り上げてみました。

夏目漱石が亡くなった後、長く、漱石に師事していた寺田寅彦（物理学者・随筆家）が芥川龍之介に漱石の言葉を紹介しています。

「いいかね。教師はあの築山のとっぺんが最終の目標のごとく教えるだろうし、学生もそう思うだろう。でも実は、勉学も生きること、いかに早くてっぺんに登るかなんてどうでもいいことさ」「いろんなどころから登って、滑り落ちるものもあれば、転んでしまうものもいる。山に登るのはどこから登ってもいいのさ。むしろ転んだり、汗を掻き掻き半べそくらいしたほうが、同じてっぺんに立っても、見える風景は格別なんだ。ミチクサはおおいにすべしさ」（「ミチクサ先生」 伊集院静 著 講談社）

実際に、漱石がこのような言葉を言ったのかどうかは分かりません。作家 伊集院さんが漱石ならこのような言葉を言うのだろうと想像して書かれたものなのかも知れませんが、生き方について、考えさせられる言葉です。

みなさんは、子どもの時にお母さんから「ミチクサをせずに帰ってくるのよ」と言われた経験はありませんか。「ミチクサをする」ってあまり良い言葉に聞こえませんか。寄り道をせずにまっすぐ進んだ方がいいのでしょうか・・・。

私たちは、子どもが一つのことができるようになると次の段階のことができるようになってほしいと願います。そして、できるだけ失敗をしないようにして、安全にやり切ってほしいと願います。子どもがまっすぐに生きていくことは、子どもの成長を願う親としての願いでしょう。でも、漱石（伊集院さん）は、山登りは、登る道はいろいろある、どこから登ってもいい。そして早く登らなくてもいい。むしろ、転んだりしながら登った方が、登った後の景色がいいのだと言っています。山登り（生き方）の極意なのでしょう。

みなさんも、これまでの経験でうまく事が進んですぐに事を成し遂げたり、解決したりしたものよりも、失敗しながらも苦勞をしてできたほうが達成感を感じたということがあるのではないのでしょうか。「ミチクサ」は、大切なものかもしれません。

「**艱難、汝を玉にす**」（かんなん なんじを たまにす）という言葉があります。まっすぐな道を進むより、いばらの道を進んだほうが自分を磨くことができるという意味です。

人として、なかなか、いばらの道を選んで進むことはできないものです。でも、ミチクサならできそうです。ミチクサをしながらゆっくりと歩むことも生き方の一つなのかもしれません。

今月下旬から夏休みに入ります。普段は、なかなかゆっくりと話をすることができないこともあったことでしょう。夏休みには、家族で話し合う時間がもてるといいですね。